



近代淨曲巨匠私見 (二)

辻 部 華 翠

(三) 竹本綱大夫 (前名津大夫 (通稱法善寺))

七代目竹本綱大夫は若い時はそうでもなかつたのだらうが私等の知つてゐるところでは小音で、少し遠くに居ると何を云うてをるのやら少しもわからぬ。しかし大夫が場に登ると聴衆はしはぶき一つせずじつと聴いて居る。大夫も、だんだん語つて行く内に何とも云へない妙味が出てくる。私が印象に残つて忘れられないのは桂川連理柵の帯屋であつた。父半齋や長石衛門、おきぬ等のよいのは當然であるが、儀兵衛と長吉との言葉のやりとりなど聴いて居つて自然におかしさがとまらない、うまいものだと思つた。八陣の本城太功記の尼ヶ崎などの時代物又酒屋、堀川などの世話物でも揃津大掾とは又別の巧さ味ひがあり流石に名人だと思つた。此人が日吉丸の三段目を語つてゐて、お政が「佛様まで無理いうて」

と語るのを間違つて「佛様まで髪結うて」と間違ひ平氣で語りつゞけたと云ふ話は相當有名である。

(四) 竹本大隅大夫

私の知つて居る故人の内では何と云うても此人が一番巧かつたと思ふ名人豊澤團平師に血の出る様な稽古をして貰つた御蔭で何を語つても始終緊張して前後一點のすぎなく人物の語りわけは勿論人情もよく語り艶もあり腹は強し時代物もよければ世話物も巧く近代巨匠中の巨匠だと思つた、中で今もはつきり覚えてゐるのは

太十、菅四、岸姫、玉三、忠九、紙治内、長局、御殿、八陣、一谷三、壺阪、岡崎、堀川、合邦、志度寺、冥途飛脚新町、御殿、俊太夫内、すしや、鳴戸、柳、朝顔、彌作鎌腹、日向島など流石に此人を措いて是だけ語り得る人はないと思つた。

彦山九、鰻谷、講七、帶屋、野崎、双蝶々橋本、國姓爺、布引四、佐倉宗五郎の子別れなども得意の語り物であつた、明樂座で明治三十四年一月に菅原を又明治四十年三月に忠臣藏を文樂と同じ狂言を出し兩座火の出る様な競争をした、最眞最眞により其勝敗の見方は違つて居るも自分等は確に文樂の越路後の攝津大塚に勝つたと思つてゐる。併し明治の末期に腦溢血が何んかをやつてから著しく衰弱期に入り、その後は時々調子が外れたりして大隅も衰へたなあと素人の耳にも感じる様になつた、明治の奇才とも云うべき中江兆民氏は其著一年有半に大隅大夫を評せられて居るのを左に轉載する。

○是より先未だ入院せざる前、余妻を携へて堀江なる明樂座に往き大隅大夫の淨瑠璃を聴く、妻が大隅を聴く是れを始めとす、大隅は名人故春大夫の弟子にして春大夫歿後之れが三絃を任し居たる古今無双と稱せられし豊澤國平(二代目通稱清水町)に従ひ、同人に其神品とも云ふ可き三絃を以て引廻はされ、自然に故春大夫の音節の蘊奥を極むることを得たりと云ふ殊に近頃流行の壺阪寺の如きは國平實に開山にして、之を大隅に傳へたるが故に、殆んど今日に在りては大隅大夫の專賣とも云ふ可し、余出院して小塚(旅宿)に歸るや、明樂座夫の三十三所の題目を掲げ壺坂寺の段は大隅大夫之れを語ることゝ成り、毎日大入なりと聞けり。

○斯くの如くに壺坂寺の段は大隅大夫の十八番とも云ふ可き物にて爲めに大入を占むる、是非一往せざる可らず、乃ち

一日妻と共に往けり、夫れ明樂座は人形と云ひ、人形遣と云ひ、到底文樂座の巧妙に及ばず、其他道具と云ひ總て及ばず、然るに午後二時、三時の比より客衆續々詰懸け來り遂に場内立錐の地を留めざる者は、此輩全く其以前の大夫を眼底に置かず、唯大隅一人を聞くが爲めに斯くは難踏し來る也、此れを以て言へば大隅一人にて優に文樂座の向を張り居れると謂ふ可し。

○三十三所靈驗、順次段を逐て了はれり、竟に壺坂寺の段に至れり、序幕は春子大夫影にて語り去り既にして大隅大夫其相撲然たる肥大の體を掲げ來り、やがて彼の有名なる法師歌「夢が浮世か浮世が夢か」を唄ひ出し幾々絶へんと欲して絶へず、其澤市と里との唄の如き直ちに其人を現出したる如く此間に大隅大夫無き也、嗚呼技此に至りて神なり是れ淨瑠璃か、是れ嘶耶、是れ活劇か、他人の淨瑠璃は淨瑠璃なり、大隅の淨瑠璃は事實其物也、且つ彼れは故さらに拍子喝采を博せんと欲するが如き態絶て無く、唯自ら語り自ら研究して自ら満足し自ら樂しむが如き所、眞に高尚上品にして、到底他碌々たる者と比す可きに非ず、嗚呼、是れ斯道の聖也。

尙一年有半の末尾に

○近日東西の新聞一も興味の事有る無し、(中略)而して余に於て一も心を用ゐしむるに足る無し、余の期待する所は、一葉落ち涼風生する後、大阪堀江明樂座と御靈文樂座の開

場するに及び、幸にして余猶ほ往來するを得て、今兩三回

大隅大夫、越路大夫の義大夫を聴き、玉造（先々代）、紋十郎（先代）の人形を視て、以て暇を此娑婆世界に告ぐるを得んとの至願也、余の音曲に於ける饕餮番ならず、而して是等傑出せる藝人と時を同じくするを得たるは眞に幸也、余未だ不遇を嘆ずるを得ざると謂ふ可し。（明治三十四年八月三目堺市に於て此稿を畢るとあり）

尙ほ兆民氏は「近代に於ける非凡人を精選して三十一人を得たり」と云つて列舉して曰く

藤田東湖、猫八、紅勘、阪本龍馬、柳橋（後に柳櫻）（竹本春大夫、橋本左内、豊澤團平、大久保利通、杵屋六翁、北里柴三郎、桃川如燕、陣幕久五郎、梅ヶ谷藤太郎（初代）、勝安房、圓朝、伯圓、西郷隆盛、和楓、林中、岩崎彌太郎、福澤諭吉、竹本越路大夫（後の攝津大掾）竹本大隅大夫、市川團洲、村瀬秀甫、九米八、星亨、大村益次郎、雨宮敬次郎、古川市兵衛、然り而して伊藤（博文）、山縣（有朋）、板垣（退助）、大隈（重信）は與からず、而して其他援々たる者曰く彼等哉、彼等哉、人名辭書の四半頁をも汚すに足らず云々。

右の如くにて兆民氏は竹本春大夫、豊澤團平、攝津大掾、大隅大夫の四名人を明治の元勳よりも非凡人なりとし推稱して居るは眞に此四名人に取りては知己を得て居るものと思ふ。

大隅に關する感想はもう少し詳しく書きたいが、あまり長

文になるのを虞れ又別の機會に書く事にする。

本稿の筆者辻部圓三郎氏は別項の通り去る十一月四日急逝された。折角御期待を願つた「近代淨曲巨匠私見も」前回の分と併せて二回限り未完のまゝで同氏を偲ぶ絶筆となつた。

去る八月廿五日同人會開催の席上、故名人達の藝談に花が咲いた際、辻部氏の永年に亘る淨瑠璃觀賞趣味生活から胸中に秘められた面白い御話を纏めて頂き度いと誰れ云ふとなく御願ひしたのが本稿執筆の動機であつた。その第一回の原稿を送つて頂いた時次の如き書面を頂戴致したが、その中に同人の抱負が十分に窺へるのである。

拙稿「淨曲巨匠私見」一向文にも成り居り不申、御遠慮申上居候處御來書に接し不文を省みず御送附申上候、何卒可然御訂正被下度

次には組大夫、住大夫、越路大夫、春子大夫、六代目彌大夫に對する私見を記し、古軼大夫が其何れにも劣らざる藝城の人にして攝津、大隅の長所を採り入れ自分の工夫と口傳と古書を研究せられ居る智識と渾然融合せる名人藝術なる事を讃美せんとするものに候へ共うまく書けますか甚だ疑問とする處に御座候云々

右の御言葉から推して前回の序文中に擧げられた近代巨匠の總ては當代古軼大夫の藝術を闡明される爲めのほんの足がかりでしかないことが諒解出来る。淨瑠璃はうたふものでなく語るものだと根本理念の上に立つて近代巨匠に新しいメスを揮ひ現代の淨瑠璃を論ぜられやうと企てられたにも拘らず稿半にして逝かる。辻部氏の古軼論を永劫に拜聴することが出来なかつたことは讀者と共に遺憾に堪えないところである。（大西記）